

第四章

非凡に生きる闘志

木更津に暁星国際学園を設立、英国ミルトン・キーンズにも進出



フランス政府の招待で留学

1960年（昭和35年）から9年間務めていた暁星学園の校長を、1968年（昭和43年）に辞任。フランスに留学しました。この留学は、フランス政府が招待してくれた形になっています。

暁星学園の校長をしている時に、フランス大使館からフランス人の学校を作りたいという相談があったんです。どうしても作りたいということだったので、暁星学園の敷地を貸すなど協力しました。それで、リセ・フランコ・ジャポネの設立に尽力したということで、大使館が感謝してくれ、「校長を辞めたのなら、フランス政府の招待という形でフランスの大学に籍を置いて研究をしないか」と申し出てくれたんです。

私も校長を首になったら、行く場所もそうないし（笑）、いろいろ考えて、行き先をアルザス地方に決めました。フランスの北東、ライン川をはさんでドイツと国境を接する地方です。長く神聖ローマ帝国の支配下にあり、近代になってからはフランスとドイツが常に係争を繰り返す中で、カトリック勢力が力を持っていました。第二次世界大戦時には、ヒトラー率いるドイツ軍が勝ち進み、フランス語の授業がなくなる日を描いた名作「最後の授業」（作・アルフォンス・ドーデ）の舞台にもなったのです。

そんな歴史に興味を持っていたので、18世紀にゲーテが遊学したというストラスブルグ大学に籍をおくことにしました。ドイツにも行ってみたかったので、半年ほどブザンソン大学にも通いました。フランス語を勉強したり、大学の講義も受けましたけれど、フランスの宗教上の名所・旧跡を回ったり、他のヨーロッパ各国にも出かけて行きました。

何年いてもいいと言われていたんですが、たいした目的もなく長くいてはボケてしまうかなと（笑）。1年半たったところで帰国しました。帰るついでにアメリカやカナダ、チリ、アルゼンチンなどを旅行してきました。

この1年半は、私の人生の中のバカンス期間、充電期間といったものでした。

帰国した1969年（昭和44年）に、暁星学園の理事長に就任。翌年からは暁星学園の幼稚園の園長を兼務、さらに1974年（昭和49年）には再び小学校・中学校・高校の校長に就任しました。

帰国子女の受け入れの必要性を痛感

1970年代、高度成長を遂げた日本は、海外からはエコノミックアニマル、日本株式会社などと揶揄され、国内では日本列島改造ブームが起こり、石油ショックに見舞われるなど、経済中心の国になっていました。日本が経済成長するに連れ、商社や銀行などが本格的に海外に進出を開始。家族ぐるみで海外に赴任する日本人も増えていきました。

文部省の統計によると、1966年（昭和41年）には海外で暮らす幼稚園から高校までの子供（海外在留子女）の人数は約4000人でしたが、1976年（昭和51年）には小学校・中学校の義務教育年齢の子供だけで約1万8000人、1986年（昭和61年）には約4万1000人と激増。

当然、帰国子女の人数も増えていきました。1971年（昭和46年）には小学校から高校までの年齢の子供が約15000人でしたが、1976年（昭和51年）には約5000人、1986年（昭和61年）には1万人を超えています。

1960年代や1970年代は、日本人学校が少なかったので現地校に入る子供がほとんどでした。ところ

